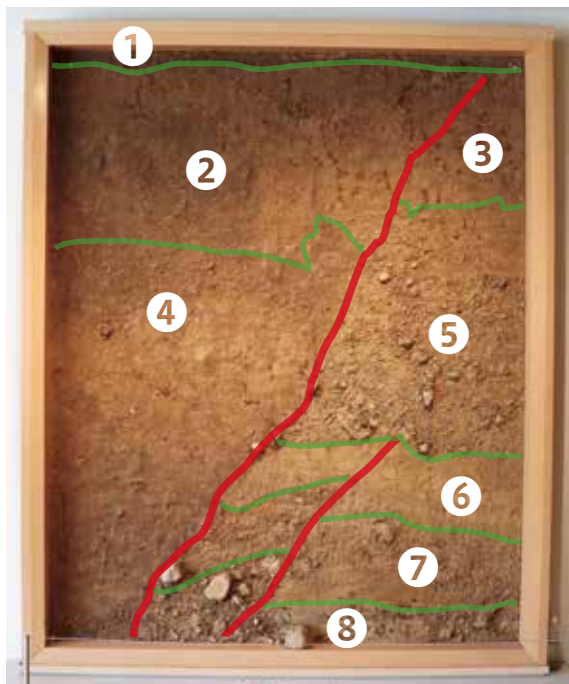


田中地区で採取した 布田川断層の剥ぎ取り標本

㊦平成8年の標本 ㊧今回の標本

平成8年の標本は、県防災センター展示・学習室に展示されています。

今回の標本も展示される予定です。



断層を境に異なる地層が接しており、断層が繰り返り動いていること、つまり大地震が繰り返されていることが読み取れます。

地層の説明

- ①耕作土
- ②腐植土(約 30,000 年前)
- ③火山灰土(約 13,000 年前)
- ④砂礫交じり火山灰土(約 27,000 年前)
- ⑤砂礫層(約 25,000 ~ 30,000 年前)
- ⑥砂層 ⑦砂礫層 ⑧砂礫層

赤…断層
緑…地層の境界
青…平成8年の剥ぎ取り部分

【参考】県防災センター展示パネル 【協力】熊本大学 鳥井真之特任准教授

調査結果を生かし、断層と共に生きる

熊本大学 くまもと水循環・減災研究教育センター 鳥井真之^{とりい まさゆき}特任准教授

これまでの調査は、「熊本地震のような地震が次いつ起きるか」ということに主眼を置き、調査結果は主に、熊本に住んでいる人たちに生かされるものでした。

一方、今回の調査は、「熊本地震を経験した私たちが世界に対して何を伝えることができるか」ということに主眼を置いています。活断層があるといわれていたところが平成28年の熊本地震でずれたのか、それとも全然別のところがずれたのか。それを調べることは、今後の活断層調査の仕方や土地の使い方を考える上で重要です。

今回の調査では前回の調査で使った踏み板やひも、釘なども見つかかり、30～50cmずれていることが確認されました。前回の調査で活断層とされた場所が、実際に熊本地震で動いたということは、当たり前にも思われるかもしれませんが、それが実際に確かめられたのは、非常に大きな結果です。

益城町は活断層と共に生きていかなければならない町なので、今回の調査の結果を、活断層についてきちんと理解し、どのようにまちづくりを進めていくのかを考える基礎にしていきたいと思っています。

